

ニホンザルの被害対策について



ニホンザルの基礎知識

① 形態

◇褐色ないし灰色の体毛をもつ

〈成獣の大きさ〉(オス) 10~18kg

(メス) 8~16kg

(体長) 50~70cm

(尾長) 5.5~12cm

② 食べ物

◇植物中心の雑食性で、植物の芽や葉、種子や果実、昆虫類などの小動物を食べる。

◇食べ物は、季節によって変化する。

◇農作物は何でも食べる

◇辛いもの、極端に苦いものはあまり食べない。

③ 行動

〈群れ〉 通常、20~数10頭のメスを中心にした群れで行動する。

メスは一生を群れの中で過ごす。オスは4~5才頃に群れを離れ、単独生活（ハナレザル）をしたり、別の群れに入ったりする。オスだけの小集団をつくることもある。

〈行動時間帯〉 日の出から日の入りまで活動（昼行性）し、夜間に行動することはない。

〈行動域〉 本来は森林性の動物であるが、菜食のために農地やその周辺に出没することがある。群れは、概ね決まった行動域で生活するため、被害を与える群れ（加害個体群）を特定できる。

決まった行動圏内を群れで移動するため、被害が連続して発生しやすい。行動域は、数平方キロ~30平方キロ程度（エサの分布や量により変化する）。

〈目のよさ〉 視力はヒトと同程度である。

〈学習能力〉 記憶力（場所・できごと・人など）や学習能力が高い。

試行錯誤しながら学習する。このため、人慣れが生じたり、集落、農地をエサ場として認識した場合は、被害が大きくなりやすい。

〈運動能力〉 数ミリの凹みや突起があれば壁などを登ることができる。

④ 繁殖

◇秋から冬に交尾する。

◇メスは5～7歳頃から、1～3年に1回1頭を出産する。

◇栄養状態が良くなると、初産年齢が低くなり、毎年出産するようになる。

◇出産時期は5～6月頃。

◇寿命は、15歳程度。

山口県内のニホンザルの群れ



ニホンザルによる被害の形態

① 農業被害

【果樹の被害状況】

◇ナシ・ブドウ・カキ・モモ等の果樹に被害が発生する。

◇群れで行動するため、果樹園のいたる所に果実と果樹の枝や葉が散乱する。

◇多くの場合、果実は数回かじられただけで放置されることが多い。



サルのブドウ被害

【野菜類の被害状況】

◇ダイコン・サツマイモなどの根菜類を地上部に近い部分で折って食べる。堀取ったり引き抜いたりする場合もある。

◇スイカやカボチャ等はその場で食害するほか、農地の外に持ち出すことがある。

◇サルの被害は群れで受けることが多いことから、野菜の枝葉が散乱することがある。

【水稲の被害状況】

◇乳熟期から収穫期までの籾の部分に食害される。籾殻が穂軸から外されるのでサルの被害と判りやすい。

◇サルの接近する山側の外側の稲に被害が多い。また、水田内を移動する場合稲の株を踏みつける被害が見られる。

② 生活被害

■人馴れや、集落・農地への依存度が高まると、納屋や人家への侵入と食品類の食害、洗濯物やテレビアンテナ等の損傷などの生活被害が発生する。

さらに人馴れが進むと、人への威嚇行為や人（子供や老人など）に対する飛びつきやかみつき等の被害が発生する場合があります。〈山口市や萩市で人的被害が報告されています。〉

なぜサルが集落に出没するのか

〈対策の方法〉

① 集落にサルを引き寄せる食べ物がある

◇クズ果実・クズ野菜の放置、放棄果樹がある

◇農作物は栄養価が高く、まとめて食べられる

◇山で少ないエサを探すより里で食べる方が楽

→集落の農作物の味を覚えたサルが増加

② 集落が安心して出没できる場所になっている

◇過疎化・高齢化が進行

◇狩猟者が減少・高齢化

◇捕獲〈追い払い〉される危険性が減少

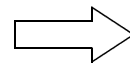
→人馴れしたサルが増加

③ 集落・農地の周りに隠れ場所となる山林が接近

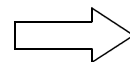
◇里山の放置

◇耕作放棄地の増加

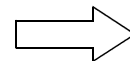
→いつでも集落に出没しやすい環境



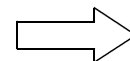
誘引物を除去する



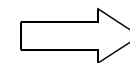
侵入防護柵を設置する



追い払う・追い上げる



有害捕獲を行う



緩衝帯を設置する

サルの農作物加害レベル

サルが集落の農作物に依存している状況を基に、地域の加害レベルを把握して下さい

- ① サルの群れが生息しているが、ほとんど被害がない。稀に少数のサルが林縁のカキやクリを食害する
- ② 季節的に森の中の果樹園やシイタケ、タケノコ等を食害する。林縁部の野菜を食害することがあるが、農耕地に群れ全体が出てくることはない。被害作物は限られている。
- ③ 群れの大半が農耕地に出てきて季節的に農作物を食害する。少数のサルが人家の軒下近くに出没し、カキ等に被害が発生する。
- ④ 群れ全体が農耕地の近くに生息しており、常時食害がある。果樹園等の被害が増加し、冬の落ち穂拾いが常習化する。被害作物が多様化し、年中被害が発生する。
- ⑤ 農耕地への出没が常習化する。集落や人家への侵入も増加する。サルの人馴れが進み、人身被害も発生する。

被害防止の方法

① サルを追い払う

◇集落に出没したサルは、ロケット花火・モデルガン・ゴム銃・スリングショットなどを使って、

人が積極的に「追い払い」を行い、できるだけ集落から離れた山へ追い払いましょう

△追い払いは単なる脅しと学習されないように、音と痛みをセットにすること。

△爆音器など音だけの追い払いは、すぐ馴れてしまいます。

◇サルを見たらいつでも追い払い、徹底したサルへの嫌がらせにより、集落が危険な場所・居心地の悪い場所であることを認識させましょう。



追い払い訓練（仁保）

効果的な追い払いと注意事項

◇追い払いは、サルの出没を確認したらすぐに行うこと。

◇追い払いはできるだけ多くの人数で行うこと。〈地域ぐるみで行うと効果的〉

◇訓練したイヌ（モンキードッグ）を用いて追い払う。

◇追い払いは、サルの群れを包むようにして山の奥へ追いかける。



モンキードッグ（仁保）

- ◇時間をかけるより長い距離を追いかけて集落からサルを離す。
- ◇追い払いでサルを殺傷しないように注意する。
- ◇ロケット花火による火事、モデルガン・ゴム銃などによる事故防止に努める。

② 誘引物を除去する〈餌付けになる行為を止める〉

- ◇サルの餌になる物（クズ野菜・クズ果実・生ゴミなど）を農地に放置したり、山などに投棄するのを止め、埋設などより適切に処分する。
- ◇取り残した野菜や果実は、早期に除去する。放棄果樹は、伐採するか早期にもぎ採ること。
- ◇ゴミ集積所の生ゴミが食べられないように管理を行うこと。
- ◇軒先などの野外に農作物を置かないこと。タマネギを軒先に吊る場合は、防護網等を設置すること。墓などのお供え物は、お参り後に持ち帰ること。



放棄果樹の収穫（仁保）

③ 侵入防止柵を設置する。

◇電気柵

サル対策のための侵入防止柵は、電気柵（ネット型）を基本とします。サルは学習能力・運動能力が高いため、イノシシ用の電気柵を代用することはできません。

△柵の高さは2m程度必要である。傾斜地では高くする必要がある。

△地面から足を離して登っても電気ショックを受けるように、電気柵のプラスとマイナスの電線は交互に配線する必要がある。
△地面はできるだけ平坦にし、柵の下に空間を作らないようにする。

△支柱は、柵の内側に設置する。

△電圧チェックを定期的実施するとともに、漏電ないように草刈りなどの管理を行う。



サル用電気柵3種

◇電気柵との複合柵

柵設置後の草刈りなどの労力や積雪等を勘案して、金網柵と電気柵を組み合わせた複合柵が有効である。（金網柵と電気柵が組み合わされた複合柵の製品が販売されている。）ワイヤーマッシュを利用して自分でつくすることもできます。

△下部構造の金網やワイヤーマッシュは格子の大きさを5cm程度とする。

△上部構造の電線は、15cm以内の間隔で配線すること。

△上部構造を電気ネット柵とすると、より効果が期待できる。

◇電気柵の周辺管理

樹木や構築物を伝った侵入を防ぐため、柵は樹木などから5m以上離す。

△飛び込みによる侵入を防ぐため、柵周辺の樹木は伐採・枝落としを行う。

△柵の周辺は、草の刈り払いなどを行って見通しを良くすること。

◇集団的な柵の設置

柵は隣接する農地と共同で囲むなどして、集落で集団的に設置すると効果的。

④ 緩衝帯を設置する（見通しの良い周辺環境づくり）

◇サルが隠れる場所をなくし、樹木からの飛び移りなどを防ぐため、農地・集落に沿った山林を帯状に伐採する。その他、樹木の強度間伐・枝落とし、藪の刈り払いなどを行う。

◇緩衝帯を設置することで、サルの発見が容易になり追い払い等が行いやすくなり、サルの警戒心を高めることができる。

◇緩衝帯は、見通しが良く明るい空間として維持管理する。



緩衝帯の整備（仁保）

その他

① 有害捕獲

◇人里に執着するサルや人馴れした単独オスザルなどに対しては、有害捕獲も必要となる。

◇「猟銃による有害捕獲」は、農地周辺で行った場合、里が危険であることの学習効果が高くなる。また、ロケット花火やモデルガンなどで追い払いを行う地域では、追い払い効果が高まる。ただし、猟銃による捕獲は群れを分散させる可能性があることから、群れの行動域を把握しながら効果を検証していく必要がある。

◇増えすぎた個体数を減らす場合は、捕獲オリを使った捕獲を基本とします。捕獲オリによる捕獲は、エサでおびき寄せて捕まえるので、餌付けにより農作物の味を覚えさせ、里に引き寄せてしまう可能性があることから注意が必要である。

◇「小型捕獲オリによる有害捕獲」は、器具の設置・移動が容易で、単独オスやオスグループ個体の捕獲に適しています。（ニホンザルは狩猟獣ではないので、捕獲には有害捕獲許可が必要となります。）

① サル接近警報システム

◇サルに電波発信器を取り付けてサルの行動を把握して、サルが集落や農地に接近した時に警報を出して、地域住民が効率的にサルの追い払いを行うもの。

◇サルの群れの行動範囲は、概ね決まっていることから、接近警報を受けて先回りして追い払いを行うことによって、群れの行動域を集落から離すことができます。

◇電波発信器は、必ず群れのメスザルにつけること。なお、野生動物用の発信器は、利用できる周波数帯が定められています。



発信器を付けたサル（仁保）



接近警報用アンテナ（仁保）

② 放牧による緩衝帯の管理

◇緩衝帯を整備することによって、サルの出没を減らす効果がありますが、緩衝帯を整備したり管理するために家畜を放牧する方法があります。

◇牛を使った放牧としては、農林総合技術センターの畜産技術部が行っている「山口型放牧」があります。サル対策として山羊の放牧なども行われています。



山口型放牧（仁保）